



第130号

## 就任のごあいさつ

私は、福井教区越前市京町別格本山引接寺住職市川隆成と申します。

去る四月十八日開催の臨時宗議会におきまして、不肖私が宗務総長に推挙いただき、五月九日に武田圓龍管長親下より、補任状を手交いただきました。もとより浅学非才であります。ただ身に余る光栄と感激いたしております。仏縁に感謝致し、管長親下のご教示を仰ぎ、その重責を担い、天台真盛宗門末寺院僧侶、檀信徒のお力添えをいただき、宗門の発展と御本山西教寺の護持のため、日々精進致す覚悟であります。

なお内局は、教学部長に滋賀教区法蓮寺住職 兼子鐵秀師、社会部長に福井教区西楽寺住職 西澤義宏師、財務部長に滋賀教区来迎寺住職 橋爪眞全師、庶務部長に伊勢教区西福寺住職 鈴木康之師とそれぞれ教学、布教、宗議会と経歴豊富な各師と力を合わせてその任に当たって参ります。

さて内局のお請式の前日五月八日にコロナウイルス感染症の分類が二類から季節インフルエンザと同等になりました。三年に渡り、コロナ禍に翻弄されてきましたが、四月の本山御忌千部会法要が、通常の日程で行われたように若干の光が見えてきたようです。しかし、感染症が無くなった訳ではありません。ワクチン接種やマスクなどできることはして参ります。

次に今年は梅雨入りと同時に台風が襲来し列島各地で大雨の被害が連続して起こっております。私は、比叡山上での「宗教サミット・平和の祈り」へ毎年参加し、宗教宗派を超え世界中から集まった宗教者と平和の祈りを続けてきました。昨年八月四日参加した際、天地がひっくり返るような豪雨と共に、さまざまな雷鳴と、左右からの稲妻に見舞われ、生き



宗務総長 市川 隆成

た心地がしませんでした。大樹天台座主親下の「天地が怒っておられる！」との大音声は今も耳に残ります。平和の問題と気候変動に無関心ではおられません。越前の海で獲れる魚の量や種類が激変し、越前から始まったお米「コシヒカリ」も温暖化とともに北へ北へと主産地が移動しています。また、私達の身の周りでは、相次ぐ物の値上げなど目に見える形で平和と気候変動につながる問題が沢山起こっております。この混乱混乱の時こそ、仏教徒たる私達は、遠くお釈迦様や御開山真盛上人のお言葉をかみしめ、生きていく指針とせねばならないでしょう。

お釈迦様の弟子達への最後の言葉「比丘たちよ。諸行は滅びゆく。怠ることなく努めよ」「諸行」とは因縁によって作られた全てのもの。すべての現象や存在のこと。それらは必ず滅びゆく無常なもの。釈尊の心身も例外でなく身をもってそのことを示され、最後に弟子達にたゆまぬ精進を促されました。

私共の御開山真盛上人は、明応四年二月晦日、伊賀の西蓮寺における四十八夜別事念佛会をお勤めされている最中に御往生されました。その最後のお言葉として「相構えて、無欲清浄にして、能々念佛すべし」申されました。遠くインドの地で、たゆまぬ精進を促した釈尊最後の教えが、真盛上人に受け継がれ、私達に御遺戒として残されたのです。我が身の滅するさまを弟子達に見せ、諸行無常を体現され、阿弥陀佛の本願におすがりするお念佛の道をさし示されました。「我が身を修め、心を正してお念佛を」とされた御開山真盛上人の教えが、五百数十年の時を経て、脈々と息づいています。十九萬日受け継がれて来、そして二十萬日へて相続されていくお念佛。今ある命に感謝し、お念佛を喜び日おくりを致します。

# 徳川家康を将軍にした近江の武将・山岡道阿弥

滋賀県立琵琶湖文化館 副館長 井上 優

令和五年五月二十七日（土）寺庭婦人・檀信徒さまに向けて、総本山西教寺にて「徳川家康と近江―大河ドラマ『どうする家康』によせて―」と題する講演をいたしました。近江坂本にルーツをもち、西教寺さまとご縁の深い私にとって、令和四年五月二十一日の教学法義講習会で畏れ多くも「伝教大師最澄の思想と真盛上人」についてお話したことに続き、光栄の至りでございました。

私は徳川家康と近江の関係において、これまで重視されなかった大事な観点が幾つかあると思っています。ひとつは、家康が豊臣政権下で近江に「在京賄領」として八万九六〇〇石もの所領を与えられていたことです。それも東海道や中山道の街道筋、石部・土山・守山宿とその周辺という要地であり、甲賀郡一万二七〇〇石、蒲生郡一万二九〇〇石、野洲郡六万四〇〇〇石という内訳です。天台真盛宗寺院が多い地域なのも面白いですが、何より家康が「近江の隠れ大名」だったという事実には、もっと注目すべきでしょう。



山岡道阿弥(イラスト:滋賀県立琵琶湖文化館)

もう一つ、私が年来主張してやまなのが「家康を将軍にした近江の武将・山岡道阿弥」との関係です。山岡道阿弥（一五四〇―一六〇四）は瀬田城主・山岡景隆の弟として生まれました。八郎左衛門という名乗りから八男の可能性が高く、若くして園城寺光浄院で出家します。山岡家は甲賀武士の家柄ですが、南北朝時代に栗太郡瀬田に進出

して瀬田城を築きました。交通の要衝である瀬田橋を管理するとともに、代々、石山寺世尊院や園城寺光浄院に庶子を送って出家入院させ、それらの寺院に室町將軍や公家、連歌師らを迎えて関係を深めました。八郎左衛門は出家後、暹慶の法名で光浄院第五代院主を務めますが、元龜三年（一五七二）五月八日に將軍足利義昭から「上山城国半国守護」に任じられ、義昭の寵臣として活躍します。義昭も興福寺僧としての経歴がありますから、通じるものがあつたのでしょうか。

ところが元龜四年、義昭は自らを擁立した織田信長に反旗を翻します。暹慶は義昭に味方して近江石山城に籠城しますが、柴田勝家・明智光秀らの攻城軍の説得に従い降伏。助命されて還俗し、山岡景友として信長に仕えます。後年、豊臣秀吉のそば近くに仕える「御咄衆（御伽衆）」となり「道



山岡道阿弥の署名と花押

阿弥」という阿弥号を名乗るようになりました。慶長三年、秀吉が死すと形見分けを受け、慶長五年には徳川家康の御家人となり側近に仕えます。同年、天下分け目の関ヶ原合戦が起きるわけですが、安治の裏切りが、合戦の勝敗を決めたのは揺るがぬ史実ですが、実は兩人ともに家康との間で道阿弥を通して裏切りの約定を取り付けていました。どちらも一級史料である古文書が遺されています。

戦後、道阿弥はほぼ大名格の九〇〇〇石を家康から与えられ「甲賀組」を預けられました。いわゆる甲賀御庭番の始まりで、幕府公式記録の『徳川実紀』に「徳川家創業の功臣」と称されます。「厭離穢土欣求浄土」を旗印とした家康とは、阿弥陀信仰でつながっていたのでしょうか。もっと広く知られるべき、近江の隠れた名将なのです。



図一 西教寺蔵『絵詞伝』

減後すぐに『真盛上人往生伝記』三卷（以下『往生伝記』）が綴られ、時を経ずして『真盛上人絵詞伝』（以下、『絵詞伝』図一）が作られました。共に上人の存命中を知る弟子が制作にあたっていることは、後世の者が宗祖を知り得る最も貴重な根本伝記であり、以後この二つが祖型となり多くの宗祖伝記が作られました。

主な宗祖伝記の変遷を概観しますと、上人直弟子の真生が明応四年（一四九五）『往生伝記』を記したことから始まります。上人臨終の様子から始まり、真生が直に見聞きしたことを記した本伝記は、本宗にとって最も尊重すべき根本聖典です。『絵詞伝』は、『往生伝記』を原資料として編年体に変更、幼少期等の内容も書き起こし、さらに四十八場面の絵も付加され作られました。これら二つの伝記を参考にしながら江戸



図二 西教寺蔵『御絵伝』

時代前期には生誕の様子等も書き起こされ『西方尼寺伝』が、さらに江戸時代中期になると、それまでの諸伝記を比較考察し簡潔にまとめた『真盛上人別伝』が編纂されました。その後、西来寺二十一世真洲（しんしゅう）によって、これまでの諸伝記や先行研究を踏まえながら、一般の人々にも宗祖の行状や教えが伝わりやすいように工夫された『円戒国師和解伝』（以下『和解伝』）が編纂されました。『和解伝』は、『円戒国師御絵伝』四幅（以下、『御絵伝』図二）の解説書として作られています。『御絵伝』は、聴衆が四幅一二一場面の絵を拝見しながら、その場面の解説を聞いて宗祖の行状を追体験することがで

きる画期的なものでした。真洲は、『往生伝記』・『絵詞伝』・『西方尼寺伝』の三つの伝記書を頼りに『和解伝』を編纂し、さらに江戸時代中期の様相や伊勢に関する記述は独自に書き起こしています。『和解伝』は、上人の生誕から往生までを漏らさず記述し多くの人に上人の道跡を伝えたいという真洲の気概が感じられる伝記書に仕上がっています。

これから八回連載で、『御絵伝』と『和解伝』を中心に宗祖真盛上人の行実を繙いていきたいと思います。（詳しくは昨年出版しました『真盛上人一代記』も合わせてご覧ください。）

## 八回連載

## 『御絵伝』と『和解伝』を中心に宗祖の行実を追体験

西願寺 長谷川 真徹

はじめに

宗祖真盛上人の道跡や考えを後世の私たちが知る手がかりは、宗祖伝記や直筆の書簡を読み解くことが肝要です。宗祖伝記の始まりは、真盛上人の入

## 「宗のあり方審議会」が 最終答申を提出

令和二年十月に組織された「宗のあり方審議会」では、当時の前阪宗務総長からの諮問を受けて、今後の時代変化に即応した寺院・僧侶・宗のあるべき姿や、その実現のための宗制度の改革の方向性について、約二年半にわたって議論を行ってきました。その間、審議会が六回にわたって開催されたほか、原案の取りまとめ組織である調査起案部会でのリモート会議・集合会議は数十回に及び、多岐にわたる検討が行われてきました。そして本年四月十九日、最終答申が久保田審議会委員長より前阪宗務総長に提出されました。その最終答申で提示された項目は次の通りです。

### 一．寺院のあり方について

- ① 檀信徒・地域との関わりについて
- ② 無住職寺院対策・住職人材の確保について
- ③ 住職収入と家庭経済について

### 二．僧侶のあり方について

- ① 男女の機会均等及び女性僧侶の待遇確保を図るための施策について
- ② 僧侶育成プログラムについて
- ③ 座次について

### 三．宗のあり方について

- ① 宗の今後の進むべき方向性について
  - ② 寺格制度の見直しについて
- その中で、今後取り組みむべき課題の柱となっている観点は、概ね次のように整理できます。

- (1) 寺院運営と宗教活動の活性化を促すため、寺院を檀信徒のみならず地域の人も含めた拠点と位置付け、様々な形で交流の機会を提供する。
- (2) 無住職寺院の増加に対応するため、兼務住職の身分と責任を明確にするとともに、複数寺院による協同運営の仕組みを考える。
- (3) 僧侶であることに誇りを持てるように、生涯を通じた教育体系を僧侶育成プログラムとして構築する。
- (4) 僧侶やその後継者の減少に歯止めをかけるため、女性や一般社会人からの登用も含めた幅広い人材活用を進める。
- (5) 今後、宗を支える檀信徒数の減少が見通される中で、宗・本山として独自財源の確保対策を進めるとともに歳出削減や寺格制度の見直しを図り、宗門としての根幹を堅持しつつ、身の丈にあった宗運営・本山運営を指向する。

最終答申を受けた前阪宗務総長は、「私どもの内局は間もなく任期満了を迎えるため、残念ながらその具体化を

進めることはできません。しかし、頂いた内容をしっかり引き継ぎ、次期内局の手でその実現が図られることを期待します」と述べました。

そして五月九日、前阪内局からの引継ぎを受けた市川新宗務総長は、その後の挨拶で「長期にわたり真摯に検討されたこの結果をしっかり受けとめ、新内局として十分な精査を行ったうえで、その実現に向けて着実に取り組みを進めます」との決意が示されました。

## 納涼 風鈴参道 通り抜け

(六月二十四日～九月十八日)



疫病退散祈願からはじまった「納涼風鈴参道 通り抜け」が今年も開催されています。今年は二千個の色とりどりのガラス風鈴を石階段より本堂前まで木枠を設置し吊るされています。子どもたちに人気の風鈴絵付け体験

験・限定ご朱印や特製夏野菜そうめんの提供を行っております。詳細は、西教寺のホームページをご参照ください。

## 本山納骨のすすめ

心ふるさと

比叡山麓 西教寺へ

西教寺では、本宗菩提寺の檀信徒さまを対象に、亡きご精霊の納骨を受け付けております。

真盛上人ゆかりの比叡山麓、琵琶湖を望むお念仏の聖地で大切な方々が心やすらかになりますようご納骨のお申し込みをお待ちしております。

事前予約が必要となります。菩提寺もしくは本山へご相談ください。

納骨料 2万円 (納骨堂にてご回向)  
3万円 (本堂・納骨堂にてご回向)

## 檀信徒の皆さまへお願い

総本山西教寺にご参拝の際は、先にご配布させていただきました「檀信徒用無料拝観券(ご家族五名様まで)」を必ず受付へご提示ください。紛失された方は、本紙(寶珠)をお持ちいただきご提示いただきますよう、お願い申し上げます。

発行所 天台真盛宗教学部

大津市坂本五丁目十三-1

総本山西教寺内

電話 大津 (〇七七五七八) 〇一三番代

印刷所

宮川印刷株式会社

大津市富士見台三十八

電話 (〇七七五三三) 二四一 番